

## 2011 年度大学入試センター試験 解説〈倫理〉

### 第1問 自己理解について(青年期) (配点 8)

問1  正解は⑤。

センター倫理第1問で定番の事例組合せ問題である。問題文で示された条件に沿って落ち着いて考えよう。分かるもの・絶対確実なものから判定していくことも、限られた試験時間の中では必要である。

ア 「断りたい」「友人に不審がられそう」と避けたい対象が2つあるので、Bの「回避－回避の葛藤」にあたる。

イ 「第一志望の学部」があるA大学は「親が反対」, 「地元」のB大学は「第一志望の学部がない」と、それぞれの対象に叶えたい要素と避けたい要素があるので、Dの「二重接近－回避の葛藤」と判別できる。

ウ 「雇用条件が良くて安定した」「もともと入りたかった」と、叶えたい対象が2つ同時に存在しているので、A「接近－接近の葛藤」である。

エ 「憧れの先輩がいる」「練習がとても厳しく時間も長い」と、1つの対象に叶えたい要素と避けたい要素が併存しているため、C「接近－回避の葛藤」にあたる。

問2  正解は④。

2011年度は事例組合せ問題がもう1問出題された。早い時期からの実戦演習が求められる。

ア 家業が「自分に向いているのではないかと感じ始め」ることで、D「自我同一性」を確立しつつある状態である。

イ 「自分を大切にしたい」とあるので、C「自己愛」にあたる。

ウ 「私という人間について改めて考えるようになった」と、B「自我意識」に目覚めている。

エ 「離島や発展途上国で働きたい」というA「自己実現」にむけて、看護技術や知識についての研鑽に努めている。

問3  正解は③。

センター倫理第1問ではグラフ読み取り問題も定番である。込み入った数値の読み取りが求められることもあるので、慌てず選択肢文に含まれる要素をていねいに吟味していくことが肝心だ。

- ③ 図から読み取れる通りである。
- ① 前半は正しいが、中学生・高校生、父親・母親とも協調型が順次減少しているの、後半が誤り。
- ② 前半は正しいが、母親の自己主張型は順次増加しているの、後半が誤り。
- ④ 前半は正しいが、高校生の自己主張型は順次増加しているの、後半が誤り。
- ⑤ 前半は正しいが、父親の協調型は順次減少しており、後半が誤り。

なお、本問で用いられた資料は、「2010年8月第4回センター試験本番レベル模試」でも出題された。年間を通じての模試の積み重ねがいかに重要であることを示す一件である。

## 第2問 努力について（源流思想）（配点 24）

問1  正解は④。

- ④ 青年を惑わしたといった罪状で死刑判決を受けたソクラテスが、これを嘆く友人に対し魂が永遠であること、死が永遠の至福の世界に旅立つことを論証した対話篇が『パイドン』。
- ① 『クリトン』もプラトンが書いたソクラテスの対話篇だが、こちらでは脱獄を勧める友人に対してそれが自身の信念と相入れず、「魂への配慮」が肝心であると説いている。これらを識別させるのは細かい知識事項と言える。
- ② 『ニコマコス倫理学』はアリストテレスの著作である。
- ③ 『イリアス』はホメロスによる叙事詩である。

正解は③。

- ③ 孔子が理想の人間像としたのは「君子」であり、徳を身につけた人物のことを言う（その究極の姿が「聖人」）。
- ② 「天子」とは君主のことであり、儒家たちは、天子は君子であらねばならないと主張する（徳治政治）。
- ①④ 「至人」「真人」はいずれも荘子にとっての理想の人格のこと。

問 2 6 正解は①。

- ① 孔子は周王朝で実現していた秩序ある社会を再興するために人々が「道」を身につけ、「道」にかなった政治が行われるべきことを訴えた。しかしこれに対して老子は、道とは人為的につくられたものではないとして「無為自然」に生きるべきことを主張した。
- ② 前半が朱子、後半が王陽明についての記述になっている。
- ③ 後半が孔子に対する墨子の批判となっている。
- ④ 前半の「矯正」「礼」が荀子、「処罰」「法」が法家の韓非子についての記述となっている。

問 3 7 正解は②。

- ② プラトンによると、人間の魂は肉体という牢獄に閉じ込められる（人間として生まれる）以前にはイデア界に住んでおり、直接にイデアを見知っていた。この現象界に生まれた後はイデア界を直接見ることができなくなるが、個々の対象を感覚的に捉えるときにエロースの力を借りて真実であるイデアを想起することができ、これが真の認識だという。
- ① 魂が生前にイデア界でじかにイデアと接していたというプラトンの主張に反している。
- ③ 後半が正しくない。国家の正義と個々人の魂における正義はあくまで平衡関係にあるものであって、前者が後者の条件というわけではない。
- ④ 後半が誤り。理性・気概・欲望は抑制し合う関係にあるのではなく、理性が気概と欲望を指導することで正義の徳が成立する。

問 4 8 正解は④。

- ④ 五行の一つ「礼拝」についての正しい記述。
- ① 「巡礼月以外でも」の部分が正しくない。イスラーム暦の第十二月に当たる「巡礼月」に生涯に一度は聖地メッカへ巡礼することがムスリム（イスラーム教徒）の宗教的義務である。また、「可能になり次第」ではなく一生に一度でよい。
- ② 「昼夜を問わず」を「日中」とすれば正しくなる。昼夜を問わず一ヶ月の断食を行えば、普通の人間は死んでしまう。
- ③ ムハンマドを「神の子」としている点が誤り。ムハンマドはイスラームにおいて最大にして最後の預言者だが、キリスト教におけるイエスのように「神の子」とは位置づけられていない。

問5 9 正解は③。

- ③ イエスは「神の国はあなたがたのあいだにある」と述べ、「神の国」がかつてのイスラエル王国のように地上に実現するものであるという考え方を否定した。神の愛（アガペー）を人々が実践しているとき、そこにはすでに「神の国」は実現しているとされる。
- ① 前半が正しくない。イエスは律法学者からローマ帝国への納税の是非について問われた際に、「神の国」が地上の政治権力と矛盾するという考え方を否定した。
- ② 「神に選ばれた民であるユダヤ人」という記述が正しくない。イエスはユダヤ教の選民思想を否定し、罪を悔い改めるすべての者が救済対象であるとした。
- ④ 「神の国」を死後の世界としている点が正しくない。

問6 10 正解は④。

- ④ ブッダはあらゆるものごとは相互依存の関係にあるとの立場をとる（縁起説）ので、苦悩の原因を断ち切ることで解脱が可能になると考える。
- ① 四諦を煩惱の例としている点が正しくない。四諦はブッダの説いた四つの真理である。
- ② 冒頭の「自己の固有の本質が不変」が誤り。ブッダはあらゆる実体を否定する「諸法無我」を説いている。
- ③ 冒頭の「苦の根本原因は業」が誤り。ブッダは苦の根本原因を「無明」（真実を知らないこと）に求めており、業（前世の行為）に苦の原因を求めるバラモン教の教えを否定している。

問7 11 正解は②。

- ア 荘子の万物斉同の世界観についての記述。
- イ ブッダと同じくバラモン教の権威を否定したジャイナ教の開祖ヴァルダマナーナについての記述。解脱の手段として苦行を説いた点がブッダとの大きな違いである。
- ウ 古代ギリシアのヘレニズム期の哲学者エピクロスについての記述。エピクロスは魂の平安（アタラクシア）を追い求め、その最大の障害としての死の恐怖に打ち克つべきことを説いた。その際に彼が依拠した論理が自然哲学者デモクリトスとも共通する原子論の主張である。

問 8 12 正解は③。

- ① 「死後の可能性を考える」ことが死の不安を解消するために必要としているが、これはリード文のブッダや孔子の立場と矛盾する。
- ② 現世での努力において「先々の成果を期待する」べきでないという点がプラトン、イスラーム教、パウロの立場と矛盾する。
- ④ 「死や死後のことは不可知」という点がプラトン、イスラーム教、パウロの立場と矛盾する。

第3問 他者への善行について（日本思想）（配点 24）

問 1 13 正解は②。

- ② 奈良時代には、仏教の力で戦乱や疫病を鎮めるといふ鎮護国家思想に基づいて、朝廷の手で国分寺建立・大仏造立などの事業が行われた。
- ① 経世済民（世を治め民を救うこと）は、江戸時代の儒学者である荻生徂徠が儒学を修める意義として強調したもの。
- ③ 唯仏是真（仏だけが真実である）は、聖徳太子が残したとされる言葉「世間虚仮、唯仏是真」の一部。
- ④ 本地垂迹とは、仏こそが真理の根源であり、神は仏の仮の姿としてこの世に現れたものとする、平安時代に広まった考え方。

14 正解は③。

- ③ 漢意（からごころ）とは、外来の儒教や仏教の精神のこと。賀茂真淵・本居宣長ら国学者は、漢意を排して日本人固有の精神（やまとごころ）を探究した。
- ①②④ 情欲・執着・自尊は、特定の思想家に関連する術語ではない。

問 2 15 正解は④。

凡夫とは、煩惱に苦しむ者のこと。聖徳太子は、人はみな凡夫であるという見方に立って、意見が対立したときに自分が正しく他人が誤っていると思ひ込むことを戒めている。

④の「自分に過失がなかったかどうかを省みよ」がこの見方に合致する。なお、選択肢文はそれぞれ、十七条憲法の①第9条、②第7条、③第6条、④第10条にあたる。第1条は2007年度本試験で出題されており、資料文の学習もセンター倫理の必須項目である。

問3 16 正解は③。

- ③ 親鸞の言う善人とは、自力で善行を積み悟りを開けると思っている人のこと、これに対して悪人とは、自らの煩惱深さ・罪深さを自覚している者のことである。親鸞は、悪人こそが阿弥陀仏の救済の対象としてふさわしいと説いた。これがいわゆる**悪人正機の**教えである。
- ①② 善人を「往生が可能な人」としている点が誤り。正しくは「往生が可能だと思っている人」である。
- ④ 悪人を「善に努めようとする人」としている点が誤り。

問4 17 正解は②。

- ② 江戸時代の儒者で、伊藤仁斎ら**古学派**の人々は、当時の朱子学者の説く理が観念的・形式的なものにすぎないと批判して、日常生活における実践を重視した。仁斎は子どもの質問に答える形式で『童子問』を著し、孔子の教えの根幹にある仁・愛の実践を庶民に平易に説いた。
- ① 「易姓革命を説いた」が誤り。林羅山の説く上下定分の理に見られるように、当時の朱子学者は士農工商の封建的身分秩序を理論的に正当化する立場だった。
- ③ 「愛敬を重んじた」が誤り。陽明学者の中江藤樹の立場である。
- ④ 「知行合一を説いた」が誤り。これも中江藤樹の立場である。

問5 18 正解は①。

- ア 古典から古代聖人が天下を安んじるために人為的に制作した安天下の道を読み取り、礼楽刑政の制度を整備すべきことを説いたのは、古学派の**荻生徂徠**。
- イ 武士が支配する封建社会を批判し、すべての人が農業に従事して自給自足の生活を送る「自然世」への回帰を説いたのは、東北の医師であった**安藤昌益**。
- ウ 天下太平の世において、武士の職分は町人・農民の模範となる義の実践であるとして「士道」を説いたのは、古学の提唱者である**山鹿素行**。
- エ 「東洋道徳」「西洋芸術」という言葉を残し、東洋の伝統的精神の基盤の上に西洋の科学技術を受容すべきことを説いたのは、幕末の武士である**佐久間象山**。

問6 19 正解は④。

④ 近年のセンター倫理(特に日本思想分野)では文学者の出題が増加しており、注意を要する。ロマン(浪漫)主義とは、因習的な道徳や価値観からの解放を訴え、内面的な自我や個性の尊重を主張する文学・芸術の潮流のこと。森鷗外『舞姫』が先駆とされる。代表的な文学者としては、北村透谷・与謝野晶子などが挙げられる。

- ① 「旧来の道徳に真に従う」が誤り。
- ② 「新たな生活や社会制度のあり方を築くことができる」が誤り。
- ③ 「現実をありのままに直視」が誤り。

問7 20 正解は①。

① 夏目漱石が晩年にたどりついた境地は則天去私と呼ばれる。自我に固執せず、天命を静かに受け入れる態度のことである。①にある通り、「東洋の伝統的な思想」にのっとった考え方と言えよう。

- ② 森鷗外の説いた諦念(レジグナチオン)の哲学。
- ③ 西田幾多郎が人間経験の根本的なあり方とした、主客未分の純粹経験についての説明。
- ④ 人間を間柄的存在と捉えた和辻哲郎の考え。

問8 21 正解は②。

内容合致問題はリード文と選択肢文の要素を照らし合わせつつ、消去法によって誤りのものをつぶしていくのが確実な方法である。

② 「いずれも、善行に伴う内面それ自体が真実であることを求めた」がリード文にそのものズバリの表現がないため判断に苦しむが、「他者に対して善を行う心のあり方」(第1段落)を主題としていることを考えれば、あながち間違っているとも言えないだろう。「世俗から離れた修行」は第2段落の最澄、「日常的な善行を含む学問」は第3段落の伊藤仁斎、「偽善的な道徳から墮落することすらも必要」は第4段落の坂口安吾に、それぞれ合致する。

- ① 「いずれも、善行が偽善に陥りやすいことを危惧し」が誤り。
- ③ 「いずれも、いかにすれば善行が他者へと効果的に及ぶかを問題とした」が誤り。
- ④ 「自己の生の充実や救済よりも内面の確立を優先すべきである」が誤り。

第 4 問 寛容について（西洋近代思想）（配点 24）

問 1 22 正解は④。

「ルネサンス」とはもともと「文芸復興」を意味し、ギリシアやローマの古典を研究することにより、ありのままの「人間性」を称揚する人文主義（humanism）が進められていった。

23 正解は②。

ギリシア語原典の聖書を深く研究し、『愚神礼賛』でカトリックの墮落を厳しく批判したのは人文主義者の代表であるエラスムス。なお④のウィクリフはルターより 100 年以上前の 14 世紀に活躍した宗教改革の指導者。

問 2 24 正解は③。

ルネサンスが宗教的権威から人々を自由にするものであったという基本的知識があれば、ルネサンスの代表的文芸作品である『デカメロン』が出典である以上、神学的な見地を相対化するものだと推察することができるだろう。

問 3 25 正解は①。

- ① 「信仰のみ」「聖書のみ」というルターの基本的立場についての正しい記述となっている。
- ② カルヴァンの予定説についての記述である。
- ③ スコラ哲学の代表者トマス・アクィナスの主張である。
- ④ ルターは主著『キリスト者の自由』において、キリスト者は信仰においてはすべての者の上に立つとしつつ、同時に愛（世俗的な実践）においてはすべての者に対して下僕であると説いている。後者の観点により、彼は当時のドイツ農民戦争に対しては厳しく弾圧するべきことを主張した。

問 4 26 正解は②。

- ② 代表的モラリストのモンテーニュは主著『エッセー』のなかで、いかなる立場にある者であれ自身が絶対的な真実を知っているなどと自惚れてはならないと警告し、「ク・セ・ジュ（私は何を知るか）」を自身のモットーとした。
- ① パスカルの立場である。
- ③ デカルトの立場である。
- ④ マキャヴェリの立場である。



問 5 27 正解は④。

- ④ スピノザは、およそ実体と言えるものは神のみであるとしてすべては神の現れだとする汎神論を主張した。
- ① デカルトが説いた精神と物質の二元論についての記述である。
- ② ライプニッツの立場である。
- ③ ルネサンス期に活躍したピコ・デラ・ミランドラについての記述。

問 6 28 正解は③。

- ③ ほぼリード文に正解が示されている。ロックは、国家＝政治的権力が個人の信仰に介入することを禁じる政教分離を主張している。
- ①②④ いずれも政治権力と宗教との密接な関係が正当化されている。

問 7 29 正解は④。

ルソーの社会契約説についての設問。人間はバラバラな個人としては、自分の私的な利益を追求する「特殊意志」を持っている。しかしこの特殊意志の総和としての「全体意志」は必ずしも公共の利益を実現しない。たとえばすべての者が脱税をすれば、国家は破産して結果として個人の利益も損なわれる。これに対して人間集団としての全人民の意志（＝「一般意志」）とは本質的に公共の利益を実現する意志のことで、適正な税負担などがその例と言えるだろう。これを不満に思う個人は当然いるだろうが、結果として国家が運営されるためにはどうしても必要なことであり、不満に思う当人にとっての利益をももたらすものである。つまり一般意志の強制は人を「自由」へと「強制」する。

問 8 30 正解は①。

- ① 不寛容に対する寛容は認められるか、という面白い論点がリード文の最後でとりあげられている。第二次世界大戦後のドイツでは「自由の敵」には自由がないという「闘う民主主義」が憲法上規定されており、ナチスを賛美するような言論は憲法で禁じられた。これと同様のことを述べているのは①のみ。
- ② 宗教への干渉が肯定されているが、寛容の重要性というリード文の基本前提と矛盾する。
- ③ 多様な価値観をあくまで「普遍的な価値観」が成立する以前の「過渡的」なものとして尊重されるべきとしているが、第三段落の最後などの記述と矛盾する。
- ④ 不寛容を黙認すべきとしており、リード文最終段落の記述と矛盾する。

第5問 友情・公平・連帯について（現代社会）（配点 20）

問1 31 正解は⑥。

- ア オーウェンはイギリスの紡績工場で労務管理の近代化などに取り組んだ後、渡米してニューハーモニー村と呼ばれる理想の共同体の建設を目指した。B が合致する。
- イ サン＝シモンは貴族や地主に代わって産業者（資本家・科学者・労働者）が支配する社会の建設を主張した。D がこれにあたる。
- ウ フーリエは農業を基礎とする共産的な組織（ファランジュ）を構想した。A の「協同組合に基づく理想社会」である。以上の3人の考えはエンゲルスから資本主義に対する分析が不十分だとして空想的社会主義と呼ばれた。
- エ ウェッブ（ウェブ）夫妻は19世紀後半にイギリスで結成されたフェビアン協会の主要メンバーで、議会活動を通じて公共事業や社会保障制度の充実を目指した。C が合致する。

問2 32 正解は①。

- ① 実存主義者のサルトルは、自己の本質を自らの決断と行動によって規定していく自由な存在である人間は、アンガージュマン（社会参加）を通じて責任を引受ける必要があると説き、さらに、自己のあり方を選ぶことは全人類のあり方を選ぶことにもかわると考えた。
- ② ヤスパースについての説明である。
- ③ ユネスコ憲章前文の内容である。
- ④ ニーチェについての説明である。

問3 33 正解は④。

本年度のセンター倫理では唯一の「適当でないもの」を選ぶ問題であった。

- ④ 「本名の公開を必須とする法律が制定された」が誤り。そのような法律はなく、インターネット上の掲示板では匿名性が悪用されて罵詈雑言や根拠のない憶測が飛び交っている。

問4 34 正解は②。

- ② 第5問でもグラフ読み取り問題が出題される。選択肢文の内容をグラフの数値と突き合わせて確実に答えよう。
- ① 30歳台以降、負担増はやむを得ないとする人の割合は大きくなっている。
- ③ 総数で見ると、給付水準の維持を求める人の割合(35.2%)が、見直し(23.8%)あるいは引き下げ(8.0%)もやむを得ないとする人の割合の合計(31.8%)を上回っている。
- ④ 負担増はやむを得ないとする人の割合は、40歳台では30%を超えている。

問5 35 正解は②。

資料文読解問題も、グラフ読み取り問題と同じく選択肢文の要素を一つ一つ資料文と照らし合わせながら正誤を判定することが肝心だ。

- ② 前半部が「他の人たちが何を必要とし、何を欠いているかは、個人のニーズの構成要素なのだ」、後半部が「私たちが政治に関わろうとする動機の最も深い源泉は、他の人たちのためにニーズを感じることができる、この人間の能力のなかにこそある」に合致する。
- ① 「人がもつニーズは～共通の要素をもたない」が誤り。  
 ③ 「他者との関係に左右されない自分の真のニーズ」が誤り。  
 ④ 「自分のニーズを犠牲にしてでも」が誤り。

問6 36 正解は④。

- ④ アファーマティブ・アクション(積極的差別是正措置)の事例を問う問題である。これまで差別や不利益を受けてきた人たち(少数民族・女性・障がい者など)に対して、雇用や入学などで特別枠を設けるなど優遇措置をとることである。

①②③ 「不平等な扱いを通じた平等への配慮の例」ではない。なお、日本の行政ではポジティブ・アクションと呼び習わしている。

問7 37 正解は③。

- ③ Sの「ニーズと負担が必ずしも対応しないからこそ、連帯が必要なんだよ」という発言を受けて、Rが「借りた相手と返す相手は違う場合もあるし、みなが同じ負担をするとも限らない」と言っている点に注目しよう。たんなる貸し借りの関係ではない点に、Rは連帯と友情の共通点を見出したと考えられる。よって、「返礼を期待せずに相手を助けるような人間関係を含意している点が、友情と共通していると考えた」とある③が正解と判定できる。

- ① 「借りは必ず返す対等な人間同士の関係」が誤り。  
 ② 「互いに価値観を共有し合う共同体内部の関係」が誤り。  
 ④ 「成熟した人間同士の関係」が誤り。